

昭和SPレコードで巡れば

「国民歌謡」の再評価

逆にレコードは爆発的に売れて彼女も一躍有名歌手になった。

(三)

SPレコード収集家■城内 實

(一)

ちょうど去年の今頃、「団子三兄弟」という曲が爆発的に流行した。商業主義にも乗って一種のブームとなったが、しばらくして誰も見向きもしなくなつた。それもそのはず、人々はこの曲の芸術性に惹かれたのではなく、単にタンゴと「団子」をかけた駄洒落としての滑稽さが受けたのであり、それだけに飽きがくるのも早かつた。

この「団子三兄弟」は、NHKの「お母さんと一緒」という子供向け番組で歌われた曲であるが、NHKには他にも「みんなの歌」という時間があり、そこで流れる曲もこれと似たりよつたりである。筆者は、この

「みんなの歌」の「みんなの」という表現に、戦後民主主義の悪しき平等主義、行き過ぎた自由主義といった否定的なものを感じてならない。日教組が目指している没個性的な教育すら思い浮かべてしまう。

この「みんなの歌」に比べると、その前身とも言える戦前の「国民歌謡」にははるかに多くの名曲が残されている。

(二)

ラジオ番組「国民歌謡」は、昭和十一年という激動の年にはじまった。この年、二・二六事件が起こり、十一月には広田弘毅総理の下で日独防共協定が締結される。猟奇的な阿部定事件が世間をにぎわせる一方で、べ

ルリン・オリソピックで前畑が金メダルを獲得するという明るいニュースもあった。

歌謡曲の方では、渡辺はま子の「忘れちゃいやよ」が大流行したが、内務省は「婦女の嬌態を眼前に見る」ととき官能的唱歌」ということで発売禁止とし、

「月が鏡であつたらなら」と改題させられ、甘えたような歌声も改めて再吹き込みされた。武蔵野音楽学校を出たばかりで女学校の教師をしていた渡辺はま子は、録音の際に鼻にかかった甘い歌い方が出来ずに何度もうり直しをさせられ泣き出してしまったそうである。その挙げ句にレコードは発禁となり、踏んだり蹴つたりだったが、発禁処分となつた問題作ということでは

こうした「不健全な」歌謡曲の流行を憂慮した当時の大阪放送局（JOBK。現在のNHK大阪ラジオ第一放送。）の文芸課が、明朗清新で健全な国民的な歌謡曲の創作を目指し、ラジオ番組「国民歌謡」をスタートさせた。第一回は六月一日に奥田良三の歌つた「日本よい国」である。これを受けて東京放送局（JOAK）の方も負けじと六月十五日に島崎藤村の作詩の「朝」を朝鮮半島出身のテノール歌手永田絃次郎に歌わせ、これにより「国民歌謡」は全国レベルで放送されるようになる。

(四)

「国民歌謡」では、上述の「朝」の他にも同じ島崎藤村の「椰子の実」や、北原白秋の「落葉松」、蒲原有明の「牡蛎の殻」、西條八十の「百合」といった後世に残る数々の名曲

がある。

歌詩の方も、藤村、白秋、八十の他に大木惇夫、石川啄木、佐藤春夫、室生犀星ら一流の作家の詩が採用されており、作曲家も山田耕筰、信時潔、堀内敬三、中山晋平、近衛秀麿、大中寅二、古関裕而などその時代の代表的な作曲家が担当している。そして、歌い手も主に音楽学校出身の一流歌手たちが総動員された。

「国民歌謡」の名作は、現在のNHK「みんなの歌」とは比べものにならないくらい詩が美しく、曲調も日本の情緒に溢れ、また、歌手の方もそうした作詩、作曲家の高い芸術性に耐えうる充分な歌唱力を有していた。「団子三兄弟」のような無国籍な歌とは違って、現代に生きる我々にも強く訴えるものがある。

(五)

昭和十二年七月七日に始まった支那事変以降は、日本の情緒溢れる歌曲は少なくなり、「国民歌謡」では国民精神の高揚を狙った曲が多くなる。「忘れち

キレヤよ」が発禁処分となった

渡辺はま子は、昭和十二年十月に「愛国の花」で本領を発揮し、その後レコードを出してヒットさせている。手元にある国民歌謡選集を見ると、「くろがねの力」(昭和十四年九月)、「銃後の日本大丈夫」(昭和十四年十月)、「出征兵士を送る歌」(昭和十四年十二月)、「空の勇士」(昭和十五年一月)、「興亜行進曲」(昭和十五年七月)といった、時局を反映した歌が次々と放送されたことが分かる。

(六)

昨年に偶然「大日本の歌」というレコードを見つけた。家に帰って何気なくこのレコードを聴いてみると、その歌詩と曲のすばらしさに胸を打たれた。調べてみると、この曲は、昭和十三年の「国民歌謡」で放送された曲であり、作詩は東京音楽学校の教授だった芳賀秀次郎、作曲は東京音楽学校となつてい

る。

雲湧けり 雲湧けり
みどり島山
潮みつる 潮みつる
東の海に
この國ぞ 高光る 天^{すめらみこと}皇
神ながら 治^{しる}しめす 皇^{すめらみこと}御國
ああ吾等今ぞ讃えん
聲もとどろに
類なき 古き國がら
若き力を

この「大日本の歌」は、日本の國體を賛美した曲であり、こうした曲を取り上げること自体、時代錯誤のように思われるかもしれないが、やまと言葉を使つたこの曲は今でもその普遍的な美しさを保っている。我々が戦後忘れてしまった、乃至忘れることを強要された日本人としての精神のあり方がこの曲に凝縮されている気がしてならない。

(七)

戦後民主主義は、より広範な自由を我々にもたらしたが、そ

の結果音楽一つとっても数多くのジャンルに細分化し、NHKの「みんなの歌」も無国籍の平和ぼけした歌ばかりになってしまった。戦前という時代は、現在と比べると物質的にもそれほど豊かでなく、自由という点でもいろいろな制約があったことは間違いない。しかし、「みんなの歌」と「国民歌謡」の曲を比べてみても精神的な豊かさにおいては、「国民歌謡」の方が遙かに勝っている。逆説的かもしれないが、昭和の戦前の時代は、自由というものに対して適度な制約があったからこそ、そこから芸術性の高い名曲が生まれたと思えてならない。

人々の私的な権利だけが高々と謳われ、自由が放埒に流されがちな現代にあつて、精神面での豊かさを学ぶ上でも、戦前という時代をもう一度客観的に見つめ直すべきではないだろうか。